
サトシとシゲル

ガムベース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サトシとシゲル

【Nコード】

N1196R

【作者名】

ガムベース

【あらすじ】

着実に勢力を拡大するロケット団は確実にカントー地方をむしばんでいた。マサラタウンを旅立ったサトシは、おつきみ山でロケット団にポケモンを酷く痛めつけられてしまう。トレーナーを続けるかどうか悩んでいたサトシは、ハナダシティで共に旅立った幼馴染のシゲルと再会する。そして二人は関係を深めていく。

血まみれのピカチュウ（前書き）

ポケットモンスターの二次創作小説です。ボーイズラブあり、の予定です。

血まみれのピカチュウ

おつきみ山を抜けてハナダシティに辿り着いたサトシは、新たな町並みに心躍らせる暇もなく、洞窟での戦いで弱ってしまったピカチュウを抱えてポケモンセンターに走っていた。サトシの腕の中で、ピカチュウは息をするたびに喉を詰まらせたような音をたてる。小動物特有の異様に熱かった体温は、いまでは人肌よりも冷たくなっていた。夜眠るときに抱きしめていたようなぬくもりはもう感じられない。黄色い産毛の体は、全身に開いた皮膚の亀裂から流れ出た血液で一旦染め上げられ、乾いて赤黒くなった上にさらに緋色でまだらに塗りとくられていた。旅を共にしてきた小さな命が、急速に死に向かいつつあるのがありありとわかった。バトルのときに見せる力強さが嘘のように、あまりにもはかない姿だった。もう助からないんじゃないか、サトシは悪い予感が、いくら頭を振ってもまた首筋のあたりにすぐまわり付いてきて、拭えなかった。

ポケモンセンターの自動ドアが開くのももどかしく、肩でこじ開けるように飛び込んだサトシは、瀕死のピカチュウを取り落しそうなほど震える手でカウンターに差し出した。ジョーイは目を丸くしてはじめはサトシを見ていたが、仰向けにされたままピクリとも動かないピカチュウに気づくと、すぐに深刻な顔つきになった。

「助けて……し、死にそうなんです。いまにも死んでしまいそうなんです」

「これはひどいわ、一体どうしたの？」

「おつきみ山で……」

えっ、とジョーイは不審に思う。おつきみ山は、天然の洞窟とはいっても、道は均され電灯が取り付けられている、人の歩きやすいように手の加えられた、さして危険ではない場所なのだ。駆け出しのトレーナーであっても、瀕死に陥るほどポケモンを弱らせることは考えづらかった。

しかし、そんなことを問題にしている場合ではなかった。カウ
ターに横たわるピカチュウが一刻を争う状態なのは、一目見て明ら
かだった。外傷がひどく手術をする必要もありそうだ。いや、それ
よりも、第一に輸血をしなければならぬ出血量だった。見れば、
カウター越しに震えているサトシの胸と腕はピカチュウの血で真
っ赤に染まっており、カウターのわずかな歪みにそって流れた血
液は、ジョーイの目の前を滴り落ちていく。もしかしたら、すでに
致死量に達しようとしているかもしれない。なかった。

背中からかかえるように、手を差し入れてみると、その冷たさは
死体のそれとしか思えなかった。ジョーイは手を引っ込めそうにな
ったが、もう一度、今度はしっかりとピカチュウを抱くと、奥のド
アへと入っていった。

ゴールドンボールブリッジのロケット団員

ゴールドンボールブリッジの最後のトレーナーとして待ち構えていたのは、一般市民を装ったロケット団であった。あの嫌でも目に付く上下真つ黒の制服を着ていないと案外気づかないものだ、とシゲルは思った。そして、巷で恐れられているほど、大したことはないな、とも。

どんな凶悪なポケモンが飛び出してくるのかと思えば、草むらで捕まえたばかりとみえる、野生の慎重さと狡猾さがまだ抜けきっていない、ラッタだった。ラッタはどこにでもいる害獣で（数年前ラッタの異常繁殖が都市問題として騒がれていたのを、シゲルはテレビで見たことがある）、最終進化形態でありながら戦闘能力は高くなく、初心者でも多少の経験があれば簡単に捕まえられる。

ただ、特殊な暗示でもかけているのか、それともドーピングでもしたのか、ラッタにしては、身体能力が異様に高かったようであった……。が、シゲルの鍛えられたリザードの前では赤子同然だった。ラッタは確かに強かった、とシゲルは思う（薬の効果ではあるうが）。だが、トレーナーの腕があまりにも未熟すぎたのだった。ポケモンの基礎能力に頼り切り、トレーナーは腕を磨くことをしなかったとみえた。そんないい加減なトレーナーでも、橋の最後の番人を務めていられたのだから、この界隈のトレーナーのレベルなど知れたものである……。シゲルはハナダジムにも、さしたる期待を持つことはできなかった。

24番道路を抜け、25番道路の最東端にあるマサキの家へと向かった。

シゲルはマサキの家に着くと、さつそくドアをノックした。しかし、返事はなかった。物音一つしない。どうやら、ポケモンの一匹すらいらないようだった。

「誰かいらっしゃいませんか」

無意味だとわかっていつつ、呼びかけてみる。二十歳そこそこの若さで、いまや全国で誰もが使っているポケモン転送システムの創始者となった天才、マサキに会ってアドバイスをもらうことは、シゲルにとって、ポケモントレーナーとしての高みを目指すためには絶対に必要なことである。そうオーキドに言われたのだった。

サトシは……とシゲルは考える。サトシはマサキのことを知っているだろうか。シゲルは祖父であるオーキドに勧められてマサキを訪ねることに決めたが、サトシも同様に話を受けている可能性がある。ニビジムをサトシよりも先に制覇したことで、ハナダジムも、マサキ宅への訪問も、さらにはその後待ち構えているすべてのジム戦をも、同じようにサトシを出し抜ける、シゲルはそんなふうに期待していた。ほとんど確信といっていいくらいだった。初めてのジム戦に勝利したことで自分は浮かれていたのだと、今では冷静になることができる。だが、冷静になってもなお、サトシに負けることなど到底考えられなかった。

数分待っても誰も出てこず、シゲルは諦めてマサキ宅をあとにした。出かけているのだろう、先にハナダジムを片付けてこよう。そう考えて、シゲルはハナダシティへと引き返す。行きの道程でトレーナーに際限なく戦いを挑まれたことを思い出し、シゲルはポケモンバトルを好まない釣り人だけがぼつりぼつりと点在する、川沿いを歩くことにする。

ハナダジムへの挑戦を、シゲルは初めから小手調べ程度にしか考えていなかった。シゲルは腰に下げたとおきの相棒にそつと手を触れる。それはかすかな熱を帯びているように感じられた。トキワの森にごく少数だけ生息している、ピカチュウというポケモン。おつきみ山での、ズバット相手の活躍を思い出す。たとえピカチュウ同士で戦わせたとしても、シゲルには、サトシに圧勝するだけの絶対的な自信がある。自分のピカチュウが、ハナダジムなどで負けるはずがない、とひそかに笑った。

サトシのひとりの夜

ゴールデンボールブリッジは閑散としており、川のせせらぎだけがサトシを包み込むように囁いている。水面に映る月明かりがトサキントのヒレのように揺らめく。民家の明かりは、遠く、そしてバルビートのように温かく、儂い。ハナダシティはサトシが想像していたよりもずっと静かな町だった。昼間は活気にあふれているのかもしれないが、夜はマサラタウンとさして変わらない印象だった。自分の憧れだった都会というのは、もっと煌びやかところで……。サトシは、欄干にもたれながら思い出していた。テレビで見た、真っ暗な闇夜に恒星のように輝く、ヤマブキシティやタマムシシティの街並みを。

ピカチュウはポケモンセンターに預けたままだった。一命は取り留めたものの、出血がひどく、数か所の骨折もあって、数週間は絶対安静ということだった。

おつきみ山で会った、黒ずくめの男の顔が浮かぶ。きっとあれがロケット団というやつなのだろう。悔し涙がまたあふれそうになる。カントー地方の人間で、ロケット団の名前を知らない者はいない。サトシがつい最近、ニビシティのポケモンセンターのテレビで見た、ヤマブキシティでのテロ事件。その影響は、モンスターボールの値上げという形で現れた。サトシもその高騰ぶりに辟易したものだ（しかし買えない値段ではなかったのが幸いだった）。だが、そういったはつきりした形を呈した日常的な問題は、サトシの危機感を逆に薄れさせる結果となった。トレーナーにとってモンスターボールの値上げという問題は身近すぎて、無視できないものであり、だからこそ、サトシは本当の危機に気づこうとしなかった。サトシや、おそらくは他の大勢のトレーナーにとって、ロケット団の害悪とは、シルフ製品の値上げとしてしか目に見えなかった——見えていたからこそ、それ以上見ようとしなかったのだ。自分は危機感に

欠けていた……。サトシは、悔やんでも、悔やみきれるはずがなかった。

いっそ旅を辞めてしまおうかと思った。また、ロケット団に同じような目に遭わされるのなら。恐ろしかった。次は殺されてしまいかもしれないのだ。自分も、ポケモンも。容赦がなくて、残虐で、おつきみ山での戦いは、ポケモンバトルと呼べる代物ではなかった。圧倒的な力の差、それを徹底的に見せつけ、相手が怯える姿を見ることを喜びとするような戦い方。すでに倒れて動けないポケモンに対しての執拗な攻撃。犠牲になったピカチュウ。巨大なワンリキーによって腕をあらぬ方向に捻じ曲げられ、足を砕かれ、あらゆる穴から血が噴き出し、皮膚がはちきれ脂肪がはみ出し、しっぽが皮一枚でつながったピカチュウ。口から赤黒い粘液を吐きながら痙攣を続けるピカチュウ。その動物だか物体だか品物だかわからないものを抱き上げてとにかく走る、どこまでも、どこまでも。追いかけてくるワンリキーの地鳴りのような鳴き声と足音。行く手を遮るズバット、そして、

やつの前に置き去りにしてきた、翅のもげた眼の潰れた脚の無いバタフリー

ハナダシテイの警察は、きっとロケット団を捕まえることはできないだろう、とサトシは思った。あの凛々しい顔をした婦人警官は、傍らに従えた忠実なガーディに、とんでもなく残酷な死を与えることのほかにほきつと何もできない。ロケット団のポケモンはどう考えても普通ではなかった。遺伝子の組み換えか、それともドーピングか、どちらにせよ普通では考えられない身体能力を持っていた。だから並大抵のトレーナーでは、まともにやり合っても勝ち目はない。ジムリーダーに匹敵するほどの実力者でないと、相手になるはずなどないのだ。

ツクシ

トレーナー専用ユースホテルで、シゲルは同年代の少年と相部屋になった。少年はツクシという名前で、虫ポケモン使いだった。隣の地方のジョウトから観光旅行に来ているらしい。ツクシも、ハナダに来た記念にジムリーダーに挑戦するつもりでいたらしかった。「カスミは、三日は戻らないという話だったぜ。ツクシ、残念だったな」

ベッドに仰向けに寝転がったシゲルは、完全に乾ききらない髪に指を通した。前髪が少々鬱陶しくなってきたので、そろそろ切りたいと思う。

「そうなんだ、じゃあ挑戦は諦めるしかないかな」

ツクシの声は、上のベッドから聞こえてくる。女の子のような声をしている。

「長居するつもりはないからね。僕、明日には出ようと思うんだ」

「オレはジムリーダーが目的だからな、お別れになるな」

シゲルはごろりと横を向く。カスミが不在だったことに、少しほっとしていた。ピカチュウ一匹で、本当にジムリーダーに勝てたのだろうか。未知数の相手を甘く見ていた、少し慢心していた自分に気づく。ジムリーダー相手に小手調べとは、思えば上がりも甚だしい。「一日だけの付き合いだったね。でもいろんな話ができてよかったよ」

「オレもだ。ジョウトにはカントーにいないポケモンが沢山いることがわかったからな。カントーのバッジを集めたら、オレもジョウトに行くよ」

「そのときは、ぜひヒワタウンに来てね」

「ああ」

シゲルは目を閉じた。マサキはともかく、カスミはすぐに帰ってくるのがわかってる。町の周辺に住むポケモンを探したり、手

持ちのポケモンを鍛えたりしていれば、三日などあつという間だ。それに今日は、マサキの家とジムを訪ねることで忙しかったので、まだ町の中をほとんど見て回っていない。時間はむしろ、足りないくらいだろう。

ニビシティを、ジムバッジだけ手に入れてすぐに出てきてしまったことを思い出し、シゲルは後悔する。あのとき、どうして自分はあれほどまでに急いでいたのだろう。サトシに負けたくなかったからだろうか。確かに、ハナダジムをサトシはまだ訪れていず、狙い通り、一歩先んじることができた。だが、町を見て回ることのでられるものは決して少なくないはずだった。自分は、貴重な経験を積むチャンスを、すでに一度ふいにしてしまったのだ。シゲルはツクシに聞こえないよう、静かにため息をついた。

物音一つしない。ツクシは寝てしまったようであった。もう一人ルームメイトがいるらしいが、まだ帰ってこない。結局、今日は会えずじまいだった。やり手のトレーナーという話だったが、少々気難しい男だとツクシは言っていた。ツクシはその男と二日間部屋を共にしたが、あまり会話はなかったらしい。明日はそいつと二人だと思うと、親しくなったツクシと別れるのが余計に寂しかった。

翌日、シゲルが目覚めると、ツクシはすでに出払っていて、置手紙が部屋中央の丸テーブルに置かれていた。とりとめのない、シゲルへのお礼が書かれていただけだ。シゲルはそれを鞆にしまうと部屋を出て、ロビーに向かう。販売機でサイコソーダを一本買って、ソファに腰掛けた。テレビがついていて、ロケット団のニュースをやっていた。マサラにいるところは他人事としか思わなかったのに、昨日はまさか、シゲル自身がロケット団と対面したのだ。ゴールドンボールブリッジの下っ端は今ごろ、警察で組織のことを洗いざらい喋らされているのだろう。ポケモンという生き物は使い方次第で、実に恐ろしい道具となる。それはロケット団にしてもそうだし、警察にしても同じだった。

建物を出て草むらを目指した。ハナダの町はずれの草むらはコラツタやオニスズメといった素早いポケモンの住処で、ポケモンの敏捷性を鍛えるにはもってこいの場所だった。シゲルは、洞窟では活躍の場がなかったピジョンを存分に育ててやるつもりだった。もちろんピカチュウも素早さが自慢で、同時に鍛えることができて都合がいい。滞在中のポケモン育成の場所はここにしようと思った。

足元の草の陰に、コラツタの気配を感じる。成体のコラツタは獲物に飛び掛かるとき、音を立てることはしない。ただ、気配だけがあった。シゲルが足を止めて身構えていると、果たして野生のコラツタが、姿を見せるとほぼ同時に、シゲルの顔めがけて飛び込んできた。シゲルはぎりぎりで身をかわしながら、ピジョンに体当たりを命じる。ピジョンはシゲルの背後から飛び上がり、シゲルの目の前を放物落下していくコラツタに、地面に着地する前にくちばしを突き刺す。コラツタはきゅっと悲鳴を上げると、受け身も取らずに地面に叩き付けられた。そして、地面を引っ掻きながら体勢を立て直そうとするが、急降下してきたピジョンの翼にすれ違いざまに顔を打ち付けられ、ニョロトノの潰れたような音を立てて失神した。

一日のトレーニングで、ピジョンは格段に強くなった。というより、シゲルがピジョンの弱点に気づいたのだった。ピジョンは上下左右への方向修正は目を見張るものがあるが、斜め方向への急な転換が苦手なようだった。勘のいいトレーナー相手なら、動きを読まれてしまう恐れがある。ジムリーダーともなれば言わずもがな、命取りになるに違いなかった。残り二日間でこの弱点を克服できるかどうか。それが、ピジョンがハナダのジムリーダー戦で活躍できるかどうかの鍵だった。

ツクシその2

サトシはピカチュウの様子を見ようとポケモンセンターに戻った。ピカチュウを最初に預けたジョーイを見かけたので、呼び止めて尋ねると、ジョーイもサトシの顔を覚えていたらしく、病室へと案内してくれた。病室といっても人間の入院するそれとは違い、ポケモンを載せたベッドがただ並んでいるだけの簡易的なものだった。薬品の強い臭いがサトシの鼻をついた。

ピカチュウは手前から二番目のベッドに、全身をギプスと包帯で覆われた格好で横たわっていた。目を瞑っていて、眠っているようだった。胸だけが静かに上下に動いていた。

「あとは骨がくつつくのを待つだけ。並みのピカチュウじゃ死んでいたかもって先生は言っていたわ。よく鍛えてあるのね」

全身にいくつもの点滴が繋がっているピカチュウを目の前にして、サトシは、それらを片っ端から引き抜いて自由にやりたくなかった。こんな小さな生き物が戦い、そして傷ついている。それを、他の誰でもない、自分がさせていたのだ。サトシは自己嫌悪に陥っていた。そうだ、自由にしたい。そう、この僕からも自由に……。

まだしばらくは目を覚まさないらしいので、サトシは町を見て回ることにした。ハナダシティといえば24番道路、25番道路を流れる川と、川にかかるゴールデンボールブリッジという橋が有名だ。昨夜歩いたときは、人ひとりいなかった。昼間はきつとトレーナーで賑わっているのだろう。そう思って、町の北に足を向けた。

橋の手前まで来ると、橋の上にはいくつもの人影が立っており、それらと一緒に人ではない影、ポケモンの影も動いているのが見えた。幾多の腕自慢のトレーナーがポケモンを戦わせている。サトシは橋に踏み入るのを躊躇する。生き物の悲鳴が聞こえるたび、胃の中のものを戻しそうになった。

一番手前で戦っているのは、短パン小僧と、緑髪の虫取り少年だった。彼らのポケモンは、アーボとストライク。相性ではアーボが有利だが、動きがまるで違う。勝負は明らかだった。もうじき、片方のポケモンが橋の上に倒れ伏すのだろう。

サトシが一步踏み出すとほぼ同時に、排水溝のあふれるような悲鳴が橋上に響き渡る。決着がついたらしい。立ち竦むサトシの前に、腹を切り裂かれ白い肉を覗かせたアーボが転がってくる。ピクピクと痙攣している。白い切り口から赤い血が、ダムが決壊したみたいに、どばつと溢れる。サトシの足元に色のついた水たまりが形成されて、それはじわじわと大きくなる。サトシは足を一步も動かさなかった。

「うわあああ、アーボ！ アーボ！」

転がるように駆けてきた短パン小僧が、サトシの目の前で跪き、アーボを抱き上げる。「死ぬな、死んだら嫌だよアーボ！」

短パン小僧は、瀕死のアーボを小さな腕の中に押し込めるように抱えると、振り向くことなく町のほうへと駆けて行った。

残された虫取り少年は、肩をそびやかしながら呟いた。

「素人は、ほんと困ったもんだ」

そして、サトシに目を向ける。自分に話しかけたのかも知れないと思い、サトシは目を逸らした。視野の端に映る血だまりをなるべく見ないようにしながら、サトシは来た道を引き返す。先に進むことなど、できそうになかったからだ。

「こつちに用があるんじゃないのかい」

「別に……」

そう、特別な用事があったわけではない。川を見たかった、それだけだった。しかし、それは血に染まった川だった。

この町にしても、あまり長居したくはなかった。

「君もトレーナだろう、僕と勝負しないか」

その言葉を聞いてサトシは足を止める。おもむろに振り返ると、虫取り少年はサトシに向かって歩を進めている。

「せっかくハナダに来たんだからと思つてね、町を出る前に、記念にハナダ名所のこの橋を制覇しようと思つただけ……つまらないもんさ。こちらのトレーナーはちょっと弱すぎて、勝負にならないんだ。君はバッジをいくつ持つてる？」

そう言つて、一メートルほど手前で立ち止まった虫取り少年は、握手を求めて手を伸ばしてきた。その顔には真意の読めない微笑みが浮かんでいる。

「そうそう、僕はツクシ。よろしく」

サトシは手を出すのをためらう。差し出された手と、ツクシの顔を交互に見る。自分と変わらない年頃の少年が、ポケモンを躊躇なく傷つけるのか。この小さな手が、何十匹何百匹ものポケモンに、血を流させたのか。少年の背後には、先ほどの戦いで洗練された動きを見せつけたストライクがいた。凜々しい顔立ちをしている。このポケモンはどれほどの訓練を積んだのだろう。

「ああ、こいつ？ カントーでは珍しいんだっけ」サトシの視線に気づいたツクシは、ストライクをサトシに見せるように自分の身を除けた。「名前はストライク……って知ってるよね。僕の自慢のポケモン。かつこいいだろ？」

サトシは何とも答えなかった。ツクシは呆れたような顔をして、ストライクをボールに戻した。「君、口がきけないの？」

「いや……」

「なんだ、喋れるじゃないか。無口なんだ。ねえ、名前は何ていうんだい？」

「サトシ」

「サトシ……ってもしかして、マサラタウンの？」

「え？ そうだけど、どうして」

サトシはわけがわからず、啞然としてツクシの顔を見つめる。初対面の少年が、無名のトレーナーである自分の名前を知っているはずがない。それとも、彼は腕利きのトレーナーのようだから、情報通でもあるのだろうか？ だから、ジムバッジ所有者の名前と顔を

全員把握しているということだろうか。いや、それはあり得ない。確かにニビジムのグレーバッジは手に入れたが、バッジをたったひとつ持っているからといって特別扱いされるほど甘い世界ではないことは、サトシも承知している。

「どうして僕の名前を知ってるんだ？」

「やっぱり、君がサトシか！ あかね、シゲルって知ってるだろう」シゲル。その名前をまさか、見ず知らずの少年の口から聞くことになるうとは思わなかった。シゲルとはマサラタウンと一緒に出発し、先を競って旅をしてきた。最後に会ったのはポケモンリーグ入口だっただろうか。

ツクシは嬉しそうな顔で話を続ける。

「シゲルとね、宿泊先で部屋が同じになったんだ。君の話もいっぱい聞かせてもらったよ。ライバルなんだって？ 君たち」

「ライバル……」

その肩書きを名乗る資格が、今の自分にあるのだろうか。

「シゲルが認めたんだから、君はきっと凄腕のトレーナーなんだろうね！ さあ、僕と勝負しようよ。僕の腕前はさっき見てたろう。がっかりはさせないよ」

「いや、僕は、」

ツクシはストライクのボールを再び手に取って構えた。だがサトシは、ピカチュウやバタフリーのことを思い出すと、モンスターボールを握れない。今の手持ちはフシギソウとニドリーノ。ツクシが相手でも勝負にならないということはないだろうが、しかし、勝ち負けではなく、サトシの手は一向に動かなかった。動かないだけではなく、震えていた。

手の震えに気づいたのか、ツクシはあからさまなため息をついてボールをしまった。それから呆れた目でサトシを見た。

「あのだ、どうして震えてるわけ。ポケモントレーナーだろう？ シゲルと勝負したんだろう」

「僕は、もう……」

「駄目だ、がっかりしたよサトシ！」

ツクシはサトシの言葉を遮るように大きな声で言った。ツクシの顔にはかすかに怒りがにじんでいたが、理不尽だとサトシは思った。「勝負はまた今度にしようか。サトシは気分が悪いみたいだからさ」ツクシは、またね、と言って早足でサトシの横を抜けて、町へと戻っていった。サトシはツクシと目を合わせないように、地面に目を向けていた。アーボの血はほとんど地面に浸みこんで塗装のように見えた。ピカチュウが良くなる前にはきつと、この塗装も落ちる。ポケモンの傷などトレーナーにとってはその程度のものなのだ。

悲しき邂逅

ツクシと別れてから二日経ったが、シゲルは相変わらず同じ草むらでポケモンを育て続けていた。その甲斐あってか、ピカチュウとピジョンの実力は目に見えて伸びていた。シゲルの狙い通り、素早いコラッタやオニスズメとの戦いで、二匹とも大幅にそのスピードを成長させていた。

明日はいよいよカスミとの対決である。二匹に疲れが残らないように、今日は調子を整えるだけのつもりで軽いトレーニングで済ませることにする。

西の空に赤みが差し、二匹の影が長く、そして徐々に薄くなっていた。街灯がともり、点在していた人影がいつしか消え失せる。町はシゲルのいる草むらの東の方角にある。シゲルは日が沈む前に特訓を切り上げて、ハナダシティへ戻った。

明日のジム戦に万全の態勢で臨むため、二匹を回復させるためにポケモンセンターに向かった。ロビーを通り過ぎようとしたとき、見覚えのある後姿が目に入った。赤い背広に日に焼けて色の薄くなった赤い帽子。シゲルは、その後ろ姿を、故郷にいたころから見飽きるほど見続けてきた。ポケモンリーグの入り口で一戦を交えたきり、姿を見ることのなかった幼馴染のライバルのものだった。

しかし、サトシの背中中は、枯れ葉のように渴いた色をしているように見えた。じつと身動きせずに、サトシはテレビを眺めている。見たことのないライバルの様子に、声をかけるのが躊躇われた。シゲルはそつと背後に歩み寄る。帽子の縫い目が見えるほどに近づいても、息をしているのかどうか疑わしいくらい、目の前の幼馴染に存在感を感じなかった。

「サトシ、なあサトシ……」

恐る恐る声をかけてみるのだが、サトシは返事をしない。テレビに意識を吸い込まれてしまったみたいに、サトシの顔はニュース番

組に向けられたままだった。「ロケット団ヤマブキシティでポケモンを誘拐」。相変わらずロケット団のニュースが報道されていた。

「サトシ、聞こえているか？ シゲルだよ」

「聞こえているよ」

サトシは抑揚のない声で返事をして、衣擦れの音もしないくらい静かに振り返った。その顔には生気がまるで宿っているように見えず、シゲルは絶句した。サトシは草むらのコラッタでも眺めるような無関心な装いで、目の前で呆然とするシゲルを見やった。

「久しぶりだねシゲル、元気だったかい？」

「ああ、元気だった……」

シゲルは、どう言葉を返したらいいのかわからなかった。サトシの目はまるでゲンガーの体内のように暗く沈んでおり、シゲルの顔など映っていないようだった。どこか遠くの別の場所にある別のものを見ているようだった。

「それはよかった。僕もね、元気だったよ、シゲル。そうだ、シゲル——」

と、サトシは突然言葉を切って、掠れたような笑みを口元に浮かべた。右手をわずかに持ち上げて、何かを指し示そうとしたようだったが、止めて、すぐに下してしまった。サトシは小さくため息をつくと、再びテレビに向き直った。が、ニュースが特別気になるというわけでもなさそうで、飛蚊症特有の浮遊物を目で追うように、無意識に眺めているだけだった。シゲルは困惑し、もう一度声を掛けようとする、サトシはおもむろにそれを遮るように立ち上がった。そして、シゲルに寂しそうな薄笑いを向けると、ゆらゆらと廊下の奥に消えていった。

サトシのやつ、どうしたんだろう……。サトシの身に、それともサトシの周囲で何かがあったに違いなかった。シゲルはポケモンセンターの廊下を、サトシの後を追って歩き出した。サトシの背中を見失わないように五メートルほど後ろをつけていく。サトシは廊下の突きあたりを右に曲がり、左側の二つ目のドアに入っていた。

シゲルも後に続いた。

部屋にはベッドがいくつも並んでいて、怪我をしたポケモンの療養のための部屋らしかった。サトシはシゲルに背を向けて、ベッドの前に立って、そこに横たわるポケモンを見下ろしていた。寝ているのはサトシのパートナーのピカチュウのようだった。ピカチュウは包帯で全身をぐるぐる巻きにされて、点滴のチューブが体から何本も伸びていた。バトルのときに見せる勇猛さは微塵も感じられなかった。

「ピカチュウ」

サトシの背中中は震えていた。

「ピカチュウ、ごめん、ごめんよ……」

シゲルは黙ってサトシの背後に歩み寄った。サトシは振り向いてシゲルを見たが、何も言わず、干乾びたコクーンのようなピカチュウの姿に視線を戻し、ベッドの上に涙を落とした。

「一体どうしたんだ、ひどい怪我じゃないか。まさか事故にでもあったのか？」

シゲルはピカチュウを見下ろしながら訊いた。骨折、裂傷、打撲…… 一体何か所怪我をしているのかわからなかった。

「シゲル、君は、無事だったんだね。おつきみ山で、誰にも会わなかったんだね」

「おつきみ山？ おつきみ山がどうしたって言うんだ」

「やられたんだ。ピカチュウは、おつきみ山で。ピカチュウだけじゃない…… バタフリーは…… もっとひどい…… 殺されたよ」

「殺された……？ サトシ、何を言っているんだ？」

穏やかでない言葉に、シゲルはサトシの顔を覗き込むようにする。目が合うとサトシは急に顔を上げて、怒り狂ったニドキングのような形相でシゲルを睨んだ。

「殺されたんだよ、バタフリーは、翅も脚も触覚も全部、引き千切られて！ あいつは笑ってたんだ！ そのうえピカチュウまで、大けがをさせられて…… 僕は、バタフリーの断末魔を聞きながら逃げ

出てきたんだ！ 見殺しにしたんだよ、僕は、バタフリーを！
ピカチュウを助けるだけで、精いっぱいだったんだ。とても敵う相手じゃなかった……バタフリーが捕まって、どうしたらいいかわからなかった……」

サトシは言葉を詰まらせ、ぶつける相手を見失った怒りをいまずぐ誰にでもいいから投げつけなければならぬとでもいうように、憎悪の目をシゲルに向ける。その目は、いつでも冷静だった幼馴染の反論の言葉を待っているようでもあった。

シゲルにとってサトシの話は、にわかには信じがたいものだった。サトシの話を信じるならば、サトシが手も足も出ないほどのトレーナーがおつきみ山にいたことになる。しかしサトシの実力は確かだ。それほどの凄腕のトレーナーにシゲルは出合っていない。おつきみ山は一本道だから、シゲルが洞窟を抜けてから、そのトレーナーとサトシがおつきみ山に入ったのだろうか。

どちらにせよ、シゲルにとっても他人事では済まない事件である。サトシが全く相手にならないような凄腕のトレーナーならば、シゲルも勝てるかどうかかわからないし、無傷では間違いなく済まないだろう。シゲル自身にも危害が及ぶ恐れがあったのだ。何よりも、ポケモンを殺すことを何とも思わない残忍なトレーナーがいることが許せなかった。そいつがサトシのバタフリーを殺し、ピカチュウに重傷を負わせたのだ。

「誰だったんだ、そいつは？」

「ロケット団だよ。黒い服に赤い『R』の文字を見たんだ、間違いない」

「ロケット団だって？ おつきみ山にロケット団が出たのか？」

「そう。とんでもないよ、あいつは……。あいつのポケモンの身体能力は並じゃない。絶対に、何かがおかしいんだ」

「ロケット団のポケモンがおかしいのは、知ってる。実はオレもひとり会っているんだ。ゴールデンボールブリッジで」

「そうなのか！ そいつは、どんなやつだった、ポケモンは！？」

サトシは獲物に掴みかかろうとするクラブのようにシゲルにじり寄った。

「たしか、ラッタだったかな。……そいつなのか？」

「いや、違う。ラッタなら違うやつだ。おつきみ山にいたやつはワシリキーを持っていたんだ。でもシゲル、よく無事だったね。戦ったんだろう？」

「大したことはなかったよ。その辺の草むらで間に合わせに捕まえたような、弱っちいラッタだった。でも、身体能力はサトシの言うとおり、尋常ではなかったかもしれない。捕まえたばかりのラッタのスピードじゃなかった。たぶん、何か強い薬品を与えているのだと思う」

「ドーピングか？」

「おそらくはそうだろう。それも、フレンドリイシヨップで売っているものじゃなくて、もっと効き目の強いやつだ。独自に開発したものかもしれない」

フレンドリイシヨップにも、ポケモンの能力を一時的に高める道具が売っている。プラスパワー、ディフェンダー、などの安い道具だった。効き目はほとんど気休めのようなもので、薬そのものの効き目よりも暗示の力のほうが強いくらいだとシゲルは思っているが、シゲルも時々使うことがあり、ヨクアタールという、少々値は張るが命中率を高める道具はそれなりに重宝するものだった。シゲルの戦ったラッタは、バトルの前に強力な薬剤によって、攻撃力と素早さをラッタの許容範囲を超えて高められた状態にあった。強制的に肉体を改造させられたポケモンは、身体への負担も大きいはずだと思われた。

「ロケット団は薬品を使ってポケモンの能力を高めて、悪事に使う計画を立てていたんだな。僕のピカチュウを痛めつけて、バタフリーを惨殺したように。これからたくさんのポケモンたちがロケット団のポケモンによって犠牲になるんだ」

「サトシ、大丈夫さ。町にはジュンサーさんたちや、強力なジムリ

ーダーがいる。どの町にだっているんだ。ポケモンで戦おうとする限り、ロケット団もそう大きな動きはできないはずだ。ポケモンバトルなら、ジムリーダーたちに勝てる人間は多くないよ」

「でも、僕だってニビジムを制覇したんだ。少なくとも、ニビジムのタケシに劣らない力はあると認められているんだ。……それでも負けてしまった、手も足も出ずにだよ。ジムリーダーがどこまで頼りになるかわかったものじゃないよ」

シゲルは返す言葉がなかった。シゲルもそのことは承知していた。シゲル自身もニビジムのリーダーを倒していて、ジムリーダーが無敵ではないということは知っていた。だが、カントーに八人いるジムリーダーの中でも、ニビジムのタケシは最弱とされている。残り七人いる、タケシ以上の實力を持ったジムリーダーたちが揃ってロケット団に敗れるということは、想像に難かった。とりわけ、トキワシテイのジムリーダーにあつては、天地がひっくり返るうとも考えられないことであつた。

最強のジムリーダーと噂されるトキワジムのジムリーダーは、その正体は明かされていないが、チャンピオンに匹敵する力を持っていると噂されている。挑戦者に対しては、十分な實力があると認められたトレーナーにバッジを渡してはいたが、ポケモンバトルで敗れたことは一度もないという話である。カントーのジムリーダー勢は国内最強と謳われているが、それも、ひとえに最強のトレーナー、トキワジムリーダーがいるからである。

他のジムリーダーが破れたとしても、トキワジムのリーダーだけは負けないと心から信じることができる。

だが、もしも……万が一、トキワジムリーダーさえもロケット団の前に倒れてしまったら。彼と肩を並べるトレーナーは、カントー地方にはチャンピオンの他には存在しないのだ。そのときこそ、カントー地方は完全にロケット団に制圧されてしまうのではないか。

ロケット団がさらに人々の間に被害を出せば、警察やジムリーダーたちが動き始めるのは時間の問題だと思われた。ロケット団とカ

ントー地方のトレーナーとの全面対決になったとき、カントー地方のジムリーダーの、本当の実力が明らかになる。なによりも、カントー最強といわれる、トキワシテイジムリーダーの戦いを、シゲルは自分の目で見ることもできるかもしれないのだ。

シゲルは、震える右腕を抑えるのに必死だった。ピカチュウとサトシは、包帯と点滴の中で怯えていた方がいいだろう。ロケット団がいかに倒すべき相手でも、誰も彼もがポケモンバトルで傷つく必要はないのだ。

自分はどちらの側の人間だろうか。考えるまでもなかった。

ひとまず、ハナダジムリーダーに挑戦することに頭を切り替えよう。違う。ハナダジムリーダーの実力をみてやろう。傷だらけのポケモンに囲まれながらも、シゲルは笑みをこらえることができなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1196r/>

サトシとシゲル

2011年10月7日03時17分発行